

コンラッド創作態度の変化について

植 木 利 彦

岡山理科大学教養部

(昭和54年 9月21日 受理)

I

コンラッドの作品を批評するにあたって、多くの批評家が、1910年前後を境として、コンラッドの作品における質的变化を問題にしている。質的变化とは、晩年のコンラッドの作品がコンラッドの新分野への移行を意味するものとする解釈と、この頃より彼の作家としての力量が衰えてきたと解釈するものである。作家の作品をある一定の時期をもって、はっきりと区別することはなかなか難しいことではあるが、この小論では、作品の質的变化ではなく、コンラッドの創作態度の変化に焦点を合わせるので、便宜上、1895年から1910年迄を前期、以後を後期とする一応の区切りをつけ、幾人かの批評家の質的变化や創作態度の変化についての意見を参照しながら、論を進めたい。

II

P. L. ウィリーは複雑な精神構造を持つ人間を単純化して描いた後期の作品をコンラッドが新たに寓話的な世界を描こうとしたものであり、コンラッドの創作能力の衰微を示すものではないと考えている¹。しかしこのような解釈をする批評家の数は少なく、大部分の批評家は創作能力の衰微を示すものと解釈している。例えば、J. ゲラードは、晩年の作品における登場人物の心理的、精神的深みのなさに注目し、1894年から1903年に及ぶ驚くほどの創作活動に起因する極度の疲労によるものと推論している²。D. ヒューウィットは『偶然』を例にとって、それ以前の作品とそれ以後の作品について次のように述べている。

We remember the connection in the earlier works between the man who is supposedly above reproach and the 'bad' man whom he cannot disown: ... The dénouement in these books comes from the realization of similarities between men apparently dissimilar and of the complexity of human character, of the 'unforeseen partnership'. But here de Barral leads to no further knowledge of Anthony, who could never understand his father-in-law because he is himself presented as immune from all evil but his one excess of chivalry, ...³

ヒューウィットは、晩年の作品に見られるような善悪のはっきりとした形は『西洋人の眼

の下に』において、ロシヤ的なものを悪と考え、ロシヤ的なものと相容れない西洋的なものを善としたところにコンラッドの衰微が見えだしたとし、「秘密の分身」が区切りとなっているとする。何故なら若い船長はこれ以前の作品の主人公と同じく、自己の信念の本質を認識し、更に夢の実現化の問題に直面するのである。そして最終的には、自己の分身を闇の海に沈めることによって、分身に取付かれていた自我の解放を達成するのである。このことは、コンラッドが、「闇の奥」に描いた、我々が知らない我々の心奥に存在する悪の要因を認めながらも、一方では、絶対的な価値観にすがりつきたい願望との間に生ずる精神的葛藤に決着をつけたのだとヒューウィットは説明している⁴。

E. W. セイドは、このような創作上の態度の変化が起こった原因は第一次世界大戦とその後の世界情勢の展望に対するコンラッドの考え方にあったとする。すなわち、内に秘められた悪（ドイツ）によるヨーロッパ社会への攻撃は、古いヨーロッパ的秩序の破壊をもたらすことになった。戦争中のヨーロッパ社会の状態は、コンラッドの前期の作品の多くに描かれている同一人物内における善と悪の共存、両要因の葛藤という形を彼の目の前に展開して見せたのである。そして戦後の新しいヨーロッパ社会の確立は、新しい秩序の確立をもたらすと共に、コンラッドの精神にも新しい局面を開いたとする。何故なら、古いヨーロッパ社会の崩壊と共に、コンラッドのそれまでの精神世界は過去のものとして彼の心の中に存在するが、コンラッドは、戦後のヨーロッパに対して、戦前のドイツの役割を演ずる国はロシヤであると考えていたと、セイドは『コンラッドのマグラリーテ・ポラドフスカへの手紙』を引用して説明している。それ故、セイドは、大戦後、コンラッドは新しい小説を書き始めて、以前の個人の人的資質を問う作品と、善悪の区別をはっきりつけ、作家が世の中に対して忠告しなければならないと感じていた社会的責任感との間に一線をきしたのであるとする⁵。

この考え方によれば、第一次世界大戦の主原因となったドイツは、少なくともヨーロッパ社会の一構成員であり、ヨーロッパ社会を危機に落とし入れたレガット、あるいは「内なる自我」、「分身」、もしくは「我々の仲間」ということになる。そしてヨーロッパ社会は、差詰、若い船長であり、自己の内に秘められている悪の分身による自己試練を経て、新生ヨーロッパとしての自我確立を果たしたといえるのだろう。しかしコンラッドにとってロシヤは、ドイツとは違って、ヨーロッパ的ではなく、飽までスラビックであり、ヨーロッパとは相容れぬ異質なものである。これは彼の強い信念であり、彼のロシヤ嫌いは、『西洋人の眼の下に』、「独裁政治と戦争」に見られるのであり、更に後に述べるように *The English Review* への投稿を拒否した理由は、単にヒューファーとの不和だけではなく、*E. R.* 誌に何らかの形でロシヤ人が幾人か働いていたことにも起因していたらしいことから窺えるのである⁶。従ってロシヤは、後期の作品に現われる陰険、強欲、異常、独善、色情狂といった言葉で形容される徹底的な悪人と同一視されるということになる。それ故、前期の作品では、前述したように、自己の内に存在する悪の要因による自己認識

と、ある意味での感情浄化がなされたのであるが、後期の作品では、突如として主人公とは内面的にも外面的にも何ら共通点をもたない徹底的な悪人が主人公に襲いかかってくるのである。このことは、ロシヤが近い将来、突如としてヨーロッパ社会に襲いかかる可能性がありと推測されるのであり、秩序ある正常なヨーロッパ社会が、生存上、行動しなければならぬ時に、自己満足に陥っていたり、急激な状況の変化に茫然として、自己の置かれた立場を認識しえなければ、後期の小説の主人公達のような破滅を招くことになる、コンラッドが警告したのだとヒューウィットは考えている。

モザーはコンラッドの急激な創作態度の変化は「解き難き謎」としながらも、コンラッドは批評家の賞賛を受けながらも、大衆に受けなかったこと、金銭的に苦しかったこと、作家になった当初に『オルメイヤーの愚行』や『島の流れ者』といった男と女の問題を扱った作品を書いていることなどに触れ、次のような理由を上げている。

Perhaps all three motives—quest for popularity, need for a change, desire to write of love because most writers do—contributed to Conrad's beginning, and finishing, *Chance*.⁷

彼は『偶然』以後をコンラッドの創作能力の衰微の時期と見る具体的な理由として、前期の作品にも恋愛小説はあったが、ロマンティックであり、何ともいえない性的な感覚が文章の表面下に秘んでおり、主人公達は女性の中に秘む悪の要素によって身の破滅に向かうのであるが、後期の作品にはそうした要素が存在しないこと、主人公達は善良で、ハンサム、無口であり、孤独、女性とのかかわり合いが少なく、一方、女性も若く、美人で善良、世の悪に苦しめられ、家庭的にも恵まれておらず、不幸な過去の犠牲者といった一定のパターンに嵌まっていることなどを列挙し⁸、「コンラッドが『偶然』を書き上げようと決意したことが、彼の創作能力の衰微を決定的なものにした」とする⁹。

メイヤーは、コンラッドの創作能力の衰微は健康上の理由、精神的疲労、経済的困窮、小説を口述筆記してもらわなくてはならなかった等の主張を退け、精神病後、コンラッド自らが取った心理的防衛手段であるとする¹⁰。彼はコンラッドが精神病を煩った最大の原因としてヒューファーとの不和を上げている。コンラッドとヒューファーの関係は1898年の末に彼等が H. G. ウェルズ家を訪問した時に始まり、二編の小説を共同執筆し、1910年迄、ヒューファーはコンラッドの良き理解者であり、彼の小説の技巧や形式、並びに構成について多くの助言を与えてくれるなくてはならない友人であった。しかしメイヤーによれば、1907年、ゴルズワージーの家で、ヒューファーがハント嬢に会い、1908年にハント嬢が *E. R.* 誌に彼女の短編の掲載をヒューファーに頼み、その願いがかなえられて以後、二人の仲が急速に親密になるにつれて、コンラッドとヒューファーの関係は疎遠になりだした¹¹。それでもできる限りヒューファーへの非難を押えていたコンラッドも1909年7月には、*E. R.* 誌を主宰していたヒューファーに次のような手紙を送っている。

I will say no more, except to add that my contributions were for a *person* not for an *editor*. The *E. R.*, I hear, is no longer your property and there is, I believe, another circumstance which for a purely personal reason (exceptionally personal, I mean) makes me unwilling to contribute anything more to the *E. R.*¹²

更に1909年12月31日にメルドラムに送った手紙では

I have seen oftener but I am not likely to see anything of him in the future.¹³

とヒューファーに会いたくない旨を告げている。メイヤーはこれら一連の出来事について、次のように述べている。

All this must have been most distressing to Conrad, imposing upon him the burden of conflicting loyalties as well as the unhappy prospect of losing his friend, for, despite his aggressive attack upon Hueffer in July, he was far from reconciling himself to his loss.¹⁴

更にコンラッドとヒューファーの関係がこのような微妙な段階にあった、1910年2月頃、コンラッドが『西洋人の眼の下に』の原稿をロンドンにいる彼の代理人ピンカーのもとに持っていく2、3日前に、ヒューファーの妻、エリーズがコンラッドの家で、夫ヒューファーと同じように妻と離婚し、他の女性と結婚しようとしていたコンラッドの友人、ゴールズワージーの行為を非難したことに対して、コンラッドが大変激怒し、挙句のはてに、ピンカーに対しても感情的になり、口論し、結果的には精神病を煩い、三ヶ月も床に伏したことを指摘している¹⁵。メイヤーの指摘しているこの頃のコンラッドの精神的、肉体的状態がどのようなものであったかは、1910年2月6日にコンラッドの妻ジェシーがメルドラムに宛て出した手紙がよく物語っている。

The novel is finished, but the penalty [*sic*] has to be paid. Months of nervous strain have ended in a complete nervous breakdown. Poor Conrad is very ill and Dr Hackney says it will be a long time before he is fit for anything requiring mental exertion. I have been up with him night and day since Sunday week and he, who is usually so depressed by illness, maintains he is not ill, and accuses the Dr and I of trying to put him into an asylum.¹⁶

同年6月28日には、ダグラスに宛てコンラッドは次のような手紙を送っているのである。

Seriously—you may imagine what it was to have four months taken out of one's life. I am all of a shake yet; I feel like a man returned from hell and look upon the very world of the living with dread.¹⁷

これらの事実を踏まえて、メイヤーは、以後、コンラッドは病気の再発を恐れ、これまでの創作態度を改め、人間を外側から観察するようにしたとする。

III

メイヤーの説は十分に頷けるものであるが、コンラッドの創作態度の変化はこれだけに起因するものではなく、他の批評家の云う、様々な要因と絡み合っていたと考えるのが妥当であろうし、そうした要因は1910年頃までの創作活動中にもその下地ができつつあったと思われる。そこで、この章では、1910年頃までにコンラッドの創作能力が次第に枯渇しつつあり、更に経済的問題が彼の大きな精神的負担となっていたと推論し、これらの要因とヒューファーとの一件が絡み合って、彼の創作態度の変化をもたらしたとする論を進めたい。その手初めとして、年代順に幾かの手紙を見てみたい。

Since I sent you that part 1st (on the eleventh month) I have written one page. Just one page. I went about thinking and forgetting—sitting down before the blank page to find that I could not put one sentence together. To be able to think and unable to express is a fine torture. ... The progressive episodes of the story *will* not emerge from the chaos of my sensations. I feel nothing clearly. And I am frightened when I remember that I have to drag it all out of myself. ... I have had some impressions, some sensations—in my time; —impressions and sensations of common things. And it's all faded—my very being seems faded and thin like the ghost of a blonde and sentimental woman, haunting romantic ruins pervaded by rats. I am exceedingly miserable.¹⁸

If I do not talk to you much about my work it only means that I am working, —with difficulty, as ever. The more I go, the less confidence in myself I feel. There are days when I suspect myself of incapable to invent anything that could be put into a sentence. Gone are, alas! those fine days of *Alm: Folly* when I wrote with the serene audacity of an unsophisticated fool. I am getting more sophisticated from day to day. And more uncertain! I am more conscious of my unworthiness and also of my desire of perfection which,—from the conditions of the case,—is so unattainable. I would blaze like a bonfire and shall consume myself to give the feeble glimmer of a penny dip,—if even so much.¹⁹

Horrors! I think I am too late in writing. The days slipped by so fast, so fast!²⁰

これらの手紙からも判かるように、作家としての第二の人生に踏出したコンラッドは、決して順風満帆とはいかなくて、当初から創作活動では大変苦心しているのであり、作家としての自分の力量に疑問すら抱いているのである。それでも彼はこの苦しみの中で次々と

作品を発表し、『ノストローモ』を書くにあたっては強い自信のほどを見せているのである。

I have never worked so hard before—with so much anxiety. But the result is good. You know I take no credit to myself for what I do—and so I may judge my own performance. There is no mistake about this. You may take up a strong position when you offer it here. It is a very genuine Conrad. At the same time it is more of a Novel pure and simple than anything I've done since *Almayer's Folly*.²¹

彼がこれ程の自信と気力を見せたのは珍しいことであり、彼がこの作品にかけた期待の大きさが窺えるのである。コンラッドは20ヶ月の期間をかけ、この作品に心血を注いだのである。しかし作品は順調に書けたのではなく、やはり途中で行詰り、その苦しみをゴールズワージーに訴えているのである。

I have been ill again. Just got down, shaky, weak, dispirited.

No work done. No spring left to grapple with it. Everything looks black, but I suppose that will wear off, and anyhow, I am trying to keep despair under. Nevertheless I feel myself losing my footing in deep waters. They are lapping about my hips.²²

それでも何とか書き続け、完成した1904年8月には、ゴールズワージーに、9月にはガーネットとカニングム・グラハムに『ノストローモ』を書き上げたことを嬉々として報告しており、彼がいかに喜んでいたかが想像出来る。にもかかわらず、健康を損ね、心血を注いだ自信作は世の評判とはならなかった。この事実は少なからず彼を落胆させたことは間違いない。

このような落胆の日々の中で、健康を損ねた体に鞭打って、生活苦に喘ぎながら、1906年早々から、次の作品『密偵』に取りかかったのであるが、これとて遅々として進まないのである。我々は彼のこうした苦闘する姿に、彼の創作能力に対する疑問を抱くのである。彼は自分の苦闘ぶりを栗鼠に喩えて、次のように述べている。

I manage to write something nearly every day, but it is like a caged squirrel running in his wheel—tired out in the evening and no progress made.²³

しかしこの頃の彼には芸術作品としての文学と同時に、金儲の為の文学としての意識がはっきりと彼の心の中に芽生えているのである。何故なら、彼は『密偵』の序文の中で次のように告白しているのである。

I don't know whether I really felt that I wanted a change, change in my imagination, in my vision and in my mental attitude. I rather think that a change in the fundamental mood had already stolen over me unawares.²⁴

彼は、この作品をそれまでの作品とは違った、読者に親近感のあるロンドンを舞台にし、ベストセラーにしようと思いでいたものと思われる。その証拠に、この作品が売れなかったことに対して、彼は強い不満を現わしているのである。

The Secret Agent may be pronounced by now an honourable failure. It brought me neither love nor promise of literary success. I own that I am cast down. I suppose I am a fool to have expected anything else. I suppose there is something in me that is unsympathetic to the general public, —because the novels of Hardy, for instance, are generally tragic enough and gloomily written too,— and yet they have sold in their time and are selling to the present day.²⁵

Later on you will realize the inconceivable stupidity of the common reader—the man who forks out the half crown.²⁶

彼が苛立たしい言葉を吐くのも無理からぬことである。何故なら、彼は、この頃、家族の病気の治療費の金策に相当苦勞しているのであり、『ウィリアム・ブラックウッド並びにディビッド・メルドラムへの手紙』によれば、コンラッドは1907年までにかなりの借金（およそ1500ポンド）をピンカーからしているのである。更に友人達の尽力により、1908年には王立文学基金から、以前の300ポンドに追加金200ポンドを受けられるようにしてもらっているのである。因に、この年の彼の収入は次の通りである。

... the fact is that I have just received the accounts of all my publishers, from which I perceive that all my immortal works (13 in all) have brought me last year something under five pounds in royalties.²⁷

そしてこの頃、彼はゴールズワージーに対して、何度となく、自分の創作力のなさを愚痴っているのである。

Moreover I haven't slept for 3 nights and have eaten nothing to speak of for the last two days and have written not a page for a week. And it is late too. So I will go to bed and be there staring at nothing—a greatly refreshing occupation.²⁸

彼が自分の創作能力の減退を意識しながらも、最後の気力を振絞って書き続けたのが『西洋人の眼の下に』であったが、この頃には、創作能力の減退のみならず、健康も害しているのであり、その結果、精神的にも非常に不安定な状態にあったことは確かである。

I have been in bed all last week and am just beginning to pull myself together. ... Jessie, who has been quite extraordinarily worried by this bout of gout. Well it was pretty bad: the horrible depression worst of all. It is rather awful to lie helpless and think of the passing days, of the lost time. But the most cruel time is

afterwards, when I crawl out of bed to sit before the table, take up the pen,—and have to fling it away in sheer despair of ever writing a line. And I've had thirteen years of it, if not more. Anyway, all my writing life.²⁹

彼が『西洋人の眼の下に』を書き上げた時の精神的、肉体的状態がどのようなものであったかは、先に引用した妻ジェシーの手紙がよく物語っているのであり、彼女と医師とはコンラッドを精神病院に入れようとしたほどなのである。このような彼から、もはや傑作を期待することは無理なことである。しかも、心身共に疲弊した彼に追撃をかけるようなヒューファーとのあの一件は、彼の精神に決定的な打撃を及ぼしたことは容易に理解できる。

三ヶ月後、床を離れることができるようになったコンラッドを待受けていたものは何であったか？創作にあたっての極度の精神的緊張から生ずる病気の再発の恐れであり、家族を養っていかなくてはならない責任感であった。1908年1月から2年の歳月をかけた『西洋人の眼の下に』も、『ノストローモ』や『密偵』と同じく、彼に幸運をもたらすことはなかったのである。既に50の坂を起えた彼は、痛風に苦しみ、歩くことも困難な時があり、妻に筆記してもらわなくてはならない状態で、ゆっくりと時間をかけて創作する精神力も体力も失っていたのである。更に第一次世界大戦が始まり、長男ボリスが出征し、負傷して帰還しているのである。彼にとっては心の休まる時はなかったようである。こういう状態に置かれた時、彼は一体何処に小説の素材を探し求めたのだろうか？ヒューファーとの一件こそ、彼の素材として、頭に浮かんだのではないだろうか？何故なら、ヒューファーの行為は、コンラッドが前期の作品で描いた、人間としての信義を、友人の信頼を裏切る行為に外ならないのであり、その行為の原因が女性に起因し、当の二人の男女の恋が実らないというのであれば、これこそコンラッドの初期の作品の素材と類似しており、大衆受けしそうな格好の素材であったといえる。現に、それ以後に見られる作品は、初期の作品と類似しながらも、ヒロインは東洋の女性から白人の女性に替わり、主人公は女性の美しさに幻惑されて、仲間や友人の信頼を、延いては自分自身の信念すら裏切り、女性との恋も成就されない方行に展開するのである。更にコンラッドは精神的負担を軽くするために、かつてのような懐疑的、内省的な深層心理への、あるいは本能への飽くなき探査を止め、人間の性格を単純化し絵画的に、物事を現象的に描くようになるのである。ところが結果的には、こちらの方が大衆に理解され、受け入れられる作品となったのである。しかしコンラッド自身は自分の作品の価値を充分に知っていたようである。

I have been working every morning. You can imagine what sort of stuff that is. No colour, no relief, no tonality; the thinnest possible squeaky bubble. And when I've finished with it, I shall go out and sell it in a market place for 20 times the money I had for *the Nigger*, 30 times the money I had for *the Mirror of the Sea*.³⁰

これは『黄金の矢』を出版するにあたって彼が述べた言葉であるが、後期のコンラッドに

は以前のような作品を書く気力もなく、ひたすら金儲のために読者に受ける作品を書いたのである。だがこうしたコンラッドの態度は彼の作品を理解出来ず、受け入れなかった無能な読者に対する一種の辛辣なしっぺい返しであったといえるかもしれない。何故なら、コンラッドは、『偶然』の中で、彼の分身と目されるマーロウの口を借りて、「皆さんは、私が執念深い人間だとは御存じありますまい」と述べ、ド・バラルの破廉恥な「節約」をモットーとする組合やオーブ銀行にせっせと預金する大衆の愚行を、そしし見事に欺される無能ぶりを描いているのであり、無能な大衆は何を望んでいるかを、新聞記者との会話で、マーロウは次のように語るのである。

“The pressman disapproved of that manifestation. It was not his business to understand it. Is it ever the business of any pressman to understand anything? I guess not. It would lead him too far away from the actualities which are the daily bread of the public mind. ... His business was to write a readable account. ...”³¹

IV

コンラッドの創作態度の変化は、あるはっきりとした原因によって、急激に表面化したものではなく、作家に転向した当初より、彼の身体、精神にのしかかってきた緊張感、疲労感が長年にわたって蓄積し、次第に体力と気力を微弱させていったのである。しかし彼が作家として成功すると共に、金銭的にも恵まれた状態にあったならば、家族に対し強い責任感を抱いていた彼の苦悩は幾分なりとも和らげられ、彼の作家生命も伸ばされたことであろう。結果的には全くその逆であり、彼の書く作品は売れず、借金に借金を重ねる悪循環を繰り返し、1909年頃には、コンラッドは苦々しい敗北感を味わい、精神的にも肉体的にも家庭的にも窮地に立たされた神経を病み、創作能力を失った疲れきった男であった。そして1910年のヒューファーとの仲違いは、彼の唯一の精神的支えを崩壊させると共に、コンラッドが船員時代に培ってきた彼の人生に対する価値観を根底から覆したのである。その結果、病後のコンラッドは、彼自身が裏切られた男の立場に立たされ、それでもなお、自分の古い人生観にすがりつき、自己探求の闇の世界への道を歩み続けるべきか？ それとも『救助』のリングード船長の如く、総てのものをおるがままに受け入れ、栄光ある過去の世界と訣別すべきか？ の問題に直面したのである。しかし心身共に疲労困憊し、50の坂を越えた彼には前の道を選ぶ気力はすでに無かったのである。従って、彼の創作態度の変化は、無意識的に生じたものではなく、もはや能力的にも体力的にも以前のような作品を書くことの出来なくなった彼の自己防衛本能と家族への責任感そして読者の鑑賞眼のなさに対する失望感から生じたもので、彼が心底「良し」とする変化ではなかったが、そうする以外に取るべき道がなかったための意識的な妥協的問題解決策であった。

Notes

1. Paul L. Wiley, *Conrad's Measure of Man* (New York: Gordian Press, 1966), pp. 132-199.
2. Albert J. Guerard, *Conrad the Novelist* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1965), pp. 292-293.
3. Douglas Hewitt, *Conrad: A Reassessment* (London: Bowes & Bowes, 1975), pp. 96-97.
4. *Ibid.*, pp. 70-79.
5. Edward W. Said, *Joseph Conrad and the Fiction of Autobiography* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1966), pp. 64-83.
6. Leo Gurko, *The Two Lives of Joseph Conrad*, translated by Masamichi Mizushima (Kobunsha & Co., LTD. 1969), pp. 194-195.
7. Thomas Moser, *Joseph Conrad: Achievement and Decline* (Connecticut: ARCHON BOOKS-Hamden, 1966), p. 103.
8. *Ibid.*, pp. 103-105.
9. *Ibid.*, p. 102.
10. Bernard C. Meyer, *Joseph Conrad: A Psychoanalytic Biography* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1970), pp. 242-243.
11. *Ibid.*, pp. 207-208.
12. Jean Aubry, *Joseph Conrad. Life and letters II* (Garden City: Doubleday Page & Co., 1927), p. 102. Hereafter *Life and letters I* or *II* is cited as LL., I or LL., II.
13. William Blackburn (ed.), *Joseph Conrad: Letters to William Blackwood and David S. Meldrum* (North Carolina: Duke Univ. Press, 1958), p. 191.
14. B. C. Meyer, *op. cit.*, p. 210.
15. *Ibid.*, p. 205-206.
16. W. Blackburn, *op. cit.*, p. 192
17. LL., II. p. 113.
18. Edward Garnett, *Letters from Conrad 1895 to 1924* (Bloomsbury: The Nonesuch Press, 1928), pp. 37-38. Letter to Garnet. June 19, 1896.
19. LL., I. p. 196. Letter to E. L. Sanderson. Nov. 21, 1896.
20. LL., I. p. 278. Letter to Galsworthy. Sept. 2, 1899.
21. LL., I. p. 316. Letter to J. B. Pinker. August. 22, 1903.
22. LL., I. p. 322. Letter to J. Galsworthy. Nov. 30, 1903.
23. LL., II. p. 36. Letter to Mr. and Mrs. Galsworthy. August 14, 1906.
24. Joseph Conrad, *The Secret Agent* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1972), p. ix.
25. LL., II. p. 65. Letter to J. Galsworthy. Jan. 6, 1908.
26. LL., II. p. 68. Letter to Norman Douglas. Febr. 29, 1908.
27. LL., II. p. 94. Letter to Mrs. Galsworthy. Jan. 17, 1909.
28. LL., II. p. 72. Letter to J. Galsworthy. Aug. 1908.
29. LL., II. pp. 97-98. Letter to Galsworthy. June. 5, 1909.
30. LL., II. p. 198. Letter to Mrs. E. L. Sanderson. Dec. 31, 1917.
31. Joseph Conrad, *Chance* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1969), p. 87.

On the Change of the Mental Attitude of Joseph Conrad
Engaging in Creative Writing

Toshihiko UEKI

Department of General Education,
Okayama University of Science
Ridai-cho, Okayama 700, Japan

(Received September 21, 1979)

On criticizing Conrad's works, many critics call the change of the quality of his later works in question. But in this treatise, I do not want to analyze the change of the quality, but to call the change of his mental attitude engaging in creative writing in question, because I suppose there might be some causes of the change of the quality in the first half of his literary life. Therefore I will trace his early period as a writer for the cause of the change of his creative mind.